



13 17
門 459
巻 25

消 福 赤

重修真書太閤記三篇卷之十三

攝州御家人等為後詰馳登る事
并木下藤吉郎三好勢を破る事

周 攻 會 印

三好三人衆大軍を率り六条本願寺に押し寄せ合戦五小損亡ありしに御所方小勢も御所方小勢も掛合し難義ありしを以て寺中へ引退きけり三三人衆進み急ぎ責立あらば本意を遂ることもあらずきよ竹中重治が謀計を受く日勝上人乃舟舌明に説けり信ト七条道場より三人衆陣を引將軍今や御出寺ありと窺ひ居ける徹運乃り

太閤記三篇卷之十三

不 老 教 人 志
能 一 天 下

あを淺くけし御所方一旦乃計策よりつて
徒陣を引退くこと程なく来るを
乃時を伺ふと安んずるも好くけるは河内
國より早馬来て若江の城主三好左京大夫義繼
徒の領分を乱妨せられ遺恨やるとあるを
敵を目よめる大軍あり鹿忽の合戦あり
と承るも敵京都へ責上り御所を襲ひ奉る由
ぬる摂州の御家人伊丹池田等と謀り合を義繼
ハ四日の早朝若江を打立今夜ハ八幡小陣を取
明日早天よ攻上るゆゑと注進し

河州若江より八幡まで七里余よ遠し八幡
より狐川を渡り京六条まで三里余
義繼ハ池田伊丹と一手よむと働くを
了らぬ狐川を打つてあを待伊丹兵庫頭親興
池田筑後守勝政等あひく打つるがけり處よ
高槻の入江左近心替して三人衆よ一味し三好山
城守り弟兵庫頭とほめ山徒等多く城中よ
入けるより伊丹池田も本道を通はれ支ら
る隙取ぬべし然らば京都へ遅参せんとの隙よ
徒いり計議をある人も知づるいざや山越
し路次を急ぐ能勢郡より丹波國へ打

出山城國乙訓郡と志して馳せりけり

池田より能勢郡妙見山とあゆみ丹波國桑田

郡小路ありてをこえり牧村日野中畑を經り山

州乙訓郡出灰より出小塩山を越り久世よりい

五日の曉よりけの闇きよ義繼向明神の前陣と

取て人馬乃息と休めけり処に池田周防守同豊後守

同丹波守伊丹乃一類より荒木信濃守を看て

追手の勢より久世より着ぬんより急ぎせりやと

勧めけり又京都より後誥の大勢より八幡山

崎まで寄来るより注進しけりより岩成主税

助とて聞何さぬ摂州乃御家人一味して馳上らば

勢もあざむか多し後を断切し味方大

難義より大勢集らぬより押寄てか

けり義繼より追散り跡の者共々

恐るるたりんその間本國寺を責誥て然る

しとやける三好山城守聞てその義尤あり

後誥乃勢を防ぐハ大事の軍尋常の手配して

叶あざむか御邊と某と兩人大將して五千余騎

と引分向よりその跡あり三好日向守同下野守

を吉成松山が輩と合きて本國寺に押寄せり

約束し岩成と山城守を早より支度し桂川を

進發し日向守と下野守と將軍より御出あり

待奉りしにその体も見えぬけしに巴將軍を襲ひ
奉らんが為は責上りし我等あり本國寺焼失せバ
まことをや造る改むべしはや押寄り攻奉りて評
定し五千余人を引率し七条道場を討立けり
和田伊賀守を摂州芥川の城小居て三好が襲ひ登
りしと聞急ぎ本國寺へ馳登らんと四日乃夕方
芥川を發て山城國西岡小陣をとり一息繼摂津の
御家人追くはせりしを聞といひどもを
等を待合せんとして時刻を延しあが凶徒御所へ
乱入し事頗る難義及ぶし片時も猶豫あるす
登きよつとと思案し手勢三百余騎よてわく

る五日乃未刻小西の岡を打立り本國寺へと馳
りけり
西岡郷を山城乙訓郡あり和田が陣所を向日町
て本國寺より一里廿六町と知るべし
三好を本國寺へ寄る路次より端おくり行合たりし
は和田をめぐり三百余騎あるとも三好の五千
余騎を駈合てしと擬議をばおめりし打入左
右をぞ見ゆる只正面乃敵を破して下知し面を
つらむと戦つたり三好ハこれを中よつんを一人も
遁らむと討取やと惣勢を開いて和田より三百余騎
を追取圍あつたりと責りけり和田ハ名よ

負勇士なり鋒より火花を散り突破り切破れども
も凶徒を五千余騎四方に圍んで入替く息を継
和田を三百余騎一處に寄合て一足も引くと勇め
ども敵目よあやまれば勢後は氣疲れ八十余騎ハ
討せたり残る兵士を過半疵を蒙りて伊賀守を薄
手三ヶ処負せしめても物乃のどともを以て三好が手
の者もさすりよ能ぞ戦ひしと又討せしものを少
あらず少しひるんぞ見えぬ大勢ありと和
田あやましく討せぬべし見えぬ處は三好勢ありし
乃外は後崩れしと散れよ乱れ合けしと伊賀守
希有しと九死をわがし一生を得たり抑られ

誰人乃後誥よとれとく五色の吹貫と真先よ
か立てとの勢一千五百余騎蜂須賀父子より堀
尾稲田梶田が輩と先して木下藤吉郎が手に兵
士ありととハ木下江州より歸京の處に凶徒襲
ひ来るし乃注進を聞まはし是等を前に向けしめ
しありその上よ敵大勢ありと聞かざること
びやりゆらむとれしハ大津山科宇治田原の郷民
と語らひ紙旗紙印と押立美濃尾張乃大勢只今
後誥しして寄来る体とありけしと三好が五千余
騎大は狼狽し乃大勢よ取圍せしといふよを
しと臆病神よ誘れしと後崩れしと

又掛川よて三好と御所方後詰乃津國勢と合戦
 あつたしと聞かざ木下思案一日ハ夕陽よびつ
 つて究竟の時刻おつたや打立ると下知一件の郷
 民どとと掛川よ向を川よ添て三好岩成の兵士
 乃横合の岡の聲と發見鐘と鳴一軍の勢と
 那ーけるふらう味方乃兵士の北をも敵乃寄る
 と見違つて思ひの外よ乱さけり本國寺の御所よ
 てと和田と三好に圍まれ池田伊丹ハ掛川よて合
 戦一御所方の軍難義あるう聞食と何とあ
 めよるさとし御心を悩らせける處よけらるる遠く
 五色乃吹貫のふさめびくと竹中半兵衛もやくも

見はげしと江州より木下が歸り参りし合ハ
 打出力と合をゆるとヤもろそ真先よ進先
 ば跡よ継ぐ一千余人土烟を立て駈出一秀吉の手
 よ加え敵と追討三好勢をこころ狼狽し時
 とひひたをぐれ時の習ふと信長の大軍跡よつ
 びと見誤り太刀物具とけの旗馬印と打とそ
 かまひ乃外よ敗走すま三好義継ハ池田伊丹と
 一手よるう岩成主税助三好山城守と掛川のあ
 めよ追つ返しの戦ひけら三好岩成と地戦
 那う義継と池田伊丹と遠方より難所と走草
 臥たり岩成が手よら立らと備も崩と隊も破

と西乃山際まで押攻らむとぞ、斯く見えし
時六条より破と来る味方の軍勢と川のわたり
引續きたる信長勢と見かへけり、巴康長祐道大
驚と義継と打棄く長追を以備と固めて後誥の
兵と邊へ討んとかへけり、日既、黄昏、及び
く敵味方の分あさらり、あつらひ、岩成一人
いうは、猛くかゝり、も為方かく一、京より引返
一日向守下野守も一緒、あつらひと評定、けり、処
あつらひ、日向守も下野守も散らひ、打あつれ、岩成
が手へ落来る、おど主税助も山城守もあつらひ、つ
かくて、ハ斯處より猶豫する、ひへと、あつらひ、と一先泉州へ

引返し、あつらひと寄めと取ものも取あへず、落行
道を求め、あつらひと一口伏見木幡の邊と志し
我先よと落、あつらひと、ハ勝龍寺の城へ逃入も
あつらひ、あつらひ、ハ一万余人と聞、あつらひ、ハ漸宗徒の者
共千余人も足と本國寺より引退途中より討
死と、ハ吉成甚助、林源太郎、奈良左近、岩成弥助と
あつらひ、あつらひ、ハ八百余人とぞ聞え、あつらひ、ハ外の皆散
あつらひ、あつらひ、ハ逃失たり、木下落行もの、あつらひ、ハ追捨
本國寺へ、あつらひ、ハ上へ將軍の御所へ、あつらひ、ハ伺候、あつらひ、ハ凶徒遠く落
行て、あつらひ、ハ京都へ、あつらひ、ハ御敵一人も足と止め、あつらひ、ハおん、あつらひ、ハ御心安く
思召、あつらひ、ハ一言上かへけり、あつらひ、ハ義昭君より

御感ありて何れも信長の目代として都よ止し
も断りけりといはれりて木下が智謀乃やと知
食てけり桂川乃岩成主税助三好山城守と六条の
日向守下野守が敗北乃勢小驚りしを落行様
よかしくすることのみく木下が得る敵を以て敵
と討謀と今こそ思ひしれり

彈正忠信長急ぎ上洛乃事

并秀吉萬全の計義を獻じたる事

本國寺の寄手三好日向守同下野守其外一旗徒黨
乃者共木下が為り敗らば桂川に向ひし三好山城
守岩成主税助を京の味方乃敗軍より引立られ遠く

泉州より落行けり三好義繼の嵯峨
本國寺へ馳参りて伊丹兵庫頭親興の岩成と戦く士
卒多く討せり身事故かく打殘り
池田筑後守勝政を
三好山城守と戦つて打負ふと様あり山路
傳ひよふと池田より引退きけり憂悞を
將軍ハ義繼親興和田伊賀守をらり召れ軍功
と賞美かゝり暫く爰の伺候し守護し奉る
越年ありて今年を伊勢を討平げしとて
其用意評定ありて正月六日未刻京都乃飛脚到

来一三好凶徒蜂起一數萬の勢を以て河州を乱妨
一其勢を乘一京都へ押来て本國寺を襲ひ合戦
をかりて急めるを注進したる折しも信長食
事しておろけける御膳を押退御座を立せり
凶徒蜂起り片時も猶豫しなかりけりやく
馳上り誅戮を加ふる一家中の諸士跡を追
付べしと觸渡さる直に馬引寄て打なり騎馳
駈出まらば坐より合近習小性五六人かくま
いと續きたり勇氣無双乃大将よその荒氣
を好らるるあまの心を知て追り馳
付り三里をりも打つる馬を止めり

息を継りよとて袂より紙を包しその取出し
あまを喫せらる何あまそのよやと能く伺て注
進ありし時膳に向かひあまの飯しけりその飯
とそのま紙を打あけ袂に入て持をひし
てどありける世話しき中あも軍よりさし
大将あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
江州高宮に着りし時ハもや二千余騎におりけ
り

岐阜より高宮まで今道十五里并六町あり六
日の未刻より其夜亥刻まで五時より

今宵ハあゝの休息ありて翌日瀬田中へ押寄せ
 京都よりうきび飛脚到着一凶徒一旦御所
 小寄来るといふも諸侍より防ぎ戦あはれ
 打勝せられ凶徒遠く退散一京都静謐及
 ぶしを告奉つる信長大に悦びひ直に入浴
 せしむるも人馬とも遠路を早打し勞れ
 しくしむるもいと休めて静よ上つゆび
 その日ハ瀬田よ止病あり
 七日高宮と發一瀬田より今道十一里余及
 びり三好堀と正月二日發一河州より手間とり

四日京都一押寄合戦一七条道場へ引退き六日
 二度めの軍を打ちけ泉州一落行一注進七日
 瀬田より行合あり
 八日早朝に信長本國寺へ参着ありし將軍家より
 出仕一合戦御勝利を賀し奉つる義昭君も
 も信長乃神速よ上洛ありしことを深く感し思召
 け合戦の次第諸侍の働き木下が謀畧一仰出
 させけり信長もや厚くこれを賞し
 討取一首を二覽ありし夫よ證文を出され一兩
 日と経けり信長乃勢引も切す入浴一程おく五
 萬余及びり然らば此勢を以て凶徒の残を止り

くく忍びて居らんものを追捕とて一とあり
一が實は三好一類本國寺桂川西處の軍よ打負
て泉州より引退き一人もつくと居たるものあり
り川尾濃乃大軍日くよ入浴しけりよより三好一
族とてもりくとも京都を襲えんことこの姿み
くはうめよりくく重みく方便を廻らし討て上
るべしと評義一一族徒黨を引率し四國を治り
て引くくけりよバ残つて止する者一人もあらずけり
あつよ入江左近ハこの度凶徒よ一味きく不義明白
なりけりよバ再犯の咎赦しけりよと左近種く
侘言とて上るふよりやぶその請ふやのてて京都

一呼上を糺明あつけりよ忠功のものを為し助け
置とてくく切服をきりけり

入江左近ハ近藤連忠範十二代の孫とて忠
範の周防守頼祐の長男とて内舍人良門八代の
孫なり高槻けりよハ高月とて依て忠範を高
月殿と称と

諸や泉州堺の町人ども去年將軍家御再興の
御用途と獻ト奉らば剩今度怨敵の色と顯し
三好一類と堺の津よ引込勢揃を取持扶助を
くく重く罪科赦とてくく悉くくを誅戮し
公方の法度を正とてくく兵士とてけりよ焼

討の支度わろけろと木下藤吉郎承り堺の庄官
等その罪科輕くも無智文盲の匹夫
乃事よゆれども頗富有り武器を貯諸牢
人と扶持し津の南北に城戸櫓を構へ楯籠り
つらとを焼討し仰付らる共一日片時よ埒明い
まじ日數もつらふ四國乃凶徒加勢乃く先渡
海ゆも毛を吹く疵と設くる道理よ似て弥以
御大事よ及びゆひめん將軍御代始よ町人ホと敵
とふしあらんこと御耻辱しと一萬一彼等が貯
持し金銀財寶玉薬と大船よ積入外國よ渡りゆ
ろく日本の財を失ふ後悔ろかりごのふし恐多

と中條よゆれども我君も彼等が貯し財宝を以
て禁中の御造營將軍御所修理の用途よ充めよ
様よ御計ひゆれ尤然とくゆと言上をせらば信長
聞食其方より條ハゆれとて堺津と城郭よ構へ
敵對の色と顯りゆ町人共形り其財宝とを禁
裏柳營の用途よ充めよ方便とて一匹夫のあ
めよバ宥めよとて却て公儀を輕んぶと一一金銀
財宝ハ彼等が領知田禄也容易く出とせりゆ只
威武とせつと端的よ攻滅ゆんまら如とて宣ひを
ふ時藤吉郎ゆゆりゆり上げろ何様彼等が貯へ
一金銀と捧ぐることも御造營の御料悉く整ふ

大月三編大月三

十二

程のゆかりはしきも夫に付て彼を用ひ他を計る
街のゆかりは津の事とて其の御任を下さしめ
御威光も立御用途も整ひの様は仕ゆべしと上
しから信長聞食彼を用て他を計るし何あそ
どやと仰出はしきふり木下や上げかを堺町人
大形本願寺門徒とて因て石山本願寺上人と諷
一國恩と報じの様小説やべし本願寺上人と説ひ
こゝ、其胸中よ秘して万全の大計策よ此事成
仕ゆ上ハ堺よのさくらん天下福有の者ども再
度騒動仕るやと且両御所の御造營思召乃儘
の調ひやづくひ其方便ハわろしきよ言上仕
ぐこくゆとや上

けるよど信長弥不審の思召大氣あそと
くか左様よ三方四方よ其方の通よあそと
別よ御思慮と費あそと及ぶと然共何なる
手段と以て事を行わ其荒増とや上ゆと
宣ひよ藤吉郎御説畏てゆと謀ハ密あそと
一成就仕ゆバニも三も成就疑かゆ先試
よ一行ひやべし別よ入用ものゆと
士卒と損とるもゆと免角御任を
下さしめゆと請よ信長よ不審
ゆと思召よ智謀あそと木下
のこゝろよ定て様あそと
思ひよ然バ汝宜取計
ゆと許容あそと藤吉郎思の儘
よ計策と

施しけし案小違あなと石山本願寺上人ほんねんと初はつ先せん堺
津の町人等つ一心しつじんよ金銀財宝きんぎんざいほうと捧たてまつ獻けんかけけまよ
幾許いくさの日數ひかずも經へぶらふ數十萬兩じゅうばんりやう乃な金銀集きんぎんじふか
バらとと以もつく兩御所りやうごしよと心こころの儘ままに調進てうしんせられらるる
石山上人いしやんの勸誘くわんすいよりり門徒等もんたつらうの獻金けんきんと以もつく
内裏柳營うちりやうゑいと修理しゆりわらりしと石山軍記いしやんぐんき信長記しんぢやうき拾
遺等しゆい小云せうぐん外が詳略しやうりやく同どうどの事こと長ながけけとバらとり
いい各書かくしよ小就せうじゆく見みるる但た石山顯いしやんけん如ごと上人じやうじんと
親鸞しんらん上人じやうじん乃な十二代證じふにだいしゆ如上じやうじやう人にん乃な嫡子ちやくし信巧しんくわう院いん光
佐さのこと乃な永祿十二年えいりよくにじふにねんハ廿七歳にじふしちさい乃な乃な乃な
重修真書太閤記三篇卷之十三終

重修真書太閤記三篇卷之十四

將軍家御所造營乃事

并織田淺井兩家の士卒喧嘩乃事

三好三人衆さんこうさんにんしゆと一いつ族徒黨しゆくたつたう將軍の不執しやうじんふしやくより本
國寺くにでらよりり佛ほとけとを襲おそひ奉ほうらんことと謀まり討うて上
破やぶること天てんの道みち小違せうたひゆらぎゆ多おほよその事ことおもいふ思おもふ
外ほかに敗軍さいぐん一いつ四國しよこくより退去たいそ一いつ且かつ信長大軍しんぢやうだいぐんともつく
上洛じやうらくありしの驚おどろ死しいまく遠とほく逃にげ去さりら畿内きい静
謐しやくに屬ぞくせり乃な二好小與力にこうせうりきとり堺南北さいなんぼく乃な庄官しやうくわんとり

トめ福有乃者共悉く誅戮あゝきしと定めしと
けり木下の遠慮深智を以て堺の町人の首領する者
と捕えその罪を責て死刑と定めしとバ石山本願
寺上人とと哀せむひまづ上人より數万乃金
銀と捧げく彼等が命を請をひけるよ亦下又
一計を放らしかど顯如上人洛中洛外の門徒は手
書と下し内裏柳營御所御造營用途と獻せし
め儲ららよ上人の所望黙止しけしとバ赦しけし
罪と赦しし由中渡して堺町人の命を助け首代
金と納めしをけるよと暫時も數十方の金銀調
ひなきとまじ將軍御所の修理に取掛ゆべしと言

上しけし信長聞食悦喜限りかく藤吉郎が計略
今又始ぬとて珍らしきも此度の仕法を
武家十錢の費よ及ぶひ然し莫大の大勲功と立
たり万全の妙計奇代の明智と稱しとと感賞あ
りて即日御所造營乃事と命をりしと成就の時と
信長少も逗留あゝしと二条妙覺寺小止宿あ
りて万事と差圖形しりし
今京二条通の南室町の西新町の東よ妙覺寺と
いふ所北より南へ二町ありしと往昔小野妙覺の
宅地ふりて日像上人小施捨せし妙覺寺の田地
あり永祿十二年を十八代日興上人の時あり天正

乃未新町通の北清藏口に移と
二月廿七日鋏初あり夫より夜と日と繼て急ぐを
ふ普請の奉行ハ村井民部丞島田所之助あり敷地
を以前の御所と東二町北二町北二町北二町北二町南
との御事あり

此御所即前將軍義輝君の武衛陣御所之今との
舊地と考ふるは東ハ鳥丸西ハ新町と二町南ハ
春日北ハ近衛と三町の間とあり

爰ハ江州の淺井備前守長政と三好蜂起の注進と
聞ととのまゝ上洛御所の守護ハ在陣しけるを
信長よりびびり此度御所造營小淺井より人も人

夫と加勢よりとて頼とせあふより長政も
子細よ及ぶ承引かし東山清水寺ハ宿陣して日
人夫と出普請と手傳とてがとも左計の
大營あり人夫大勢と勞とるなりとて行届りし
処も多かりしは信長兵士と集り評定ありけり
戰場ハ臨と忠と致とも土木と運びく功と速
よめとも公方と竭と志をかかると御所乃造
營人夫小打任とて數日と経と禍りめは蕭牆の
内よ起るなり然と諸士も士卒も人夫よ打交りて
土石と運び片時もやく成就とてびびり信長手
杖と出とて赤色の小袖と赤地の錦の半臂

脛切一草鞋とく石材木と運びあつて柴田佐久
間坂井木下丹羽森佐々前田乃歴くおとひくは装
束一人夫小混トカと竭一けると見え浅井家の
諸士も徒小あまを詠め居んこといふおつて家
老諸士いほとも身輕よ出立織田家乃諸士よ打交
つ竹石と運送と然る小去年江州の戦の時箕作和
田山と責るよ至く浅井家の兵士と以く観音寺城
と押あつて信長より頼やうとよ浅井何と
り思ひけん果敢しき答よ及をりりて織田
家乃諸侍浅井の名計よて武道小鈍き弱将ありと
嘲居る処あれど今度両家の兵士打交り普請

乃手傳ひふとて織田家の兵士浅井の侍と侮
て輕とてとて信長赤装束よて出居りよと
浅井の諸侍慎うく万事聞ぬ顔く居けりよと
織田家乃兵士やうとて圖よらつて我儘とらと振舞
て然るよ信長の宿所妙覺寺へ在京の諸家ハハ
小及を洛中洛外の寺社地下人近國の住人等と
あくの獻物日絶るしまかく門前まて小市の如
くぞあける信長との獻物の品何よと引
分て半とら浅井の宿陣清水へ贈らる縁者の好と
厚くかゝるひけるよとの品と持行兵士等浅井
の兵士の聞る前ともしげと獨話けるハ貫あよあ

うぬ世あきても江州ものを別して欲心深き生質
なり軍場とて辞退しよとて利徳の方より一足
も引くかしたる人の呉るものありとも過分の
品とて一先辞義とて通圖の礼義なり何と
贈つても更よ辞讓乃會釋かく受納とてをりて
もく鐵面皮者共うかて言つ嘲る悪口度く小及びし
りい浅井の兵士等堪忍ありがたこの遺恨をいひ
り晴さんと待居けりよ御所の惣堀を信長の仰ふて
浅井柴田佐久間森等よ分て堀をらまけり浅井
が郎等三田佐右衛門が手の者と柴田佐久間が士卒
と右の悪口と谷め立して争論よ及ぶ三田あ乃日頃

無念と恠わたり時あるは手の者ども乃争論
と幸とあはれとひ士卒と率て彼悪口を柴田佐久
間の手の者と散くよ打倒しけりあぞ織田家の兵
士等しよ狼籍なりと鎗長刀を以て突合切合け
しと誠なるも合戦なり浅井の勢ハとくあけ
しと先日以来無念一途よ凝り上ふとバ命を限
つよ切果し江州武士乃武勇を顯し遺恨を晴し
耻辱と雪ぐんものと怒氣十分よ満しよとてその切
先とて當り難くけり柴田佐久間乃士卒
あかどと輕んど何の用心も及をびと道を迎
つ不意と討しよか大勢あまも支えり散

くは敗走しげきバ浅井の兵士追うけく爰も切伏
彼處に突伏江州をのし手並とくくや卑怯のそのれ
振舞うめと詔つめく追やぐは柴田佐久間が陣
所ちで追詰たり柴田佐久間此由と聞て今もたま
まの遅兵を率して馳向ひ手の者共を制するよ
及む自鎗を取て浅井の士卒を切廻る森三左衛
門も始々佐久間柴田と制止宥むやとおそひ打出
しぐその勢止しとを得むやわうけん是も同く入
乱して戦つたり浅井が手より遠藤喜右衛門と
くぐめ中島日向守が輩出向ひことと止めんとかし
けまでも森と佐久間柴田が勢をけとようう為方

形く防ぎ戦ひ且味方の危きと見捨もあくと共よ
駈合打合する軍數刻よ及べ両方よ手負討死幾百
人とのしを知び既に大事あらんことをしうを
長政も陣所を固め防戦の用意とる家人等が注
進と待居り信長ハ妙覺寺よりしあし此騒動と
聞食大よ驚さるひ軽さ者共の口惡無嘲つし詔する
常のしうめり然るを長者風形取立て至尊の御所
の經營と疎あせしと浅井の手の者近頃奇怪の
振舞とのひのどー自身馳向うく事を斷るんと
わうけると木下藤吉郎諫め奉つしける殿御身よ
て輕くく左様の場一出御ゆくと却て事六敷あり

く弥とて置ぐべきことも成ぬべし某御使と称
一罷向く鎮めやべし理非の御裁許と後日乃御
沙汰よて然るるやと置く藤吉郎只一騎を
出けよつ尋常の事少くを制しやと
思ひまじ禁中一伺候ト傳奏よ付て信長の郎等木
下藤吉郎よてひり御所御修理乃人夫等不慮の闘
諍と起しし事容易鎮めりてい恐多きや条よ
てとも勅諭の由と以ててを鎮めゆとやと存ひ
御許と蒙らんとてハ如何と存ひまじ願奉る旨
と奏問かよと様よと言上以傳奏よの旨と披
露かよと木下グヤ條神妙かよとて御許わつけ

て木下大よ悦び内裏と立出駿馬よ鞭をたて淺井
が兵士の競ひのりて戦ふ処へ乃付大音聲と發
し畏くも一天乃君の勅諭と雙方戦と止く謹で承
るよと呼るれよとて王土乃王臣あり勅諭と
いし聲よしをのり切合たる者ども忽左右へ引分
き鎗長刀と伏く平伏ひその時木下勅宣の御使か
れを下馬をひたし承るよ其方ども在京よそ
も何の為とや非常と戒め狼藉を禁止し王城
守護の役ありしやその者どもが同士軍よる法や
ある且禁裏造營乃為よ面く粉骨と竭しやが聊
の言葉戦より刃傷よ及ぶと短慮の至いよよ足び

早く遺恨を散下し和睦を結び御所經營の忠節とい
たよと一論乃始末を分明を善惡とも明白に
分るべき事ども元より近親の間柄あり深き病意
あつてさいるまじ形一依り穿鑿の処を御宥免の
るべき事の宣旨なり次は殿の御諛をいづまじも
勅諛に從ひ奉り早く和融を取結ぶ一淺井の衆
中も長者より禁裏御所の近処あり御修理を
急ぐと專とあり遺恨あつて謂ふは雑
言過言の詮義も及ぶと仰出はまじりあり將
軍も同様の台命ありと述べたるまじり淺井備
前守長政も出来り木下より向ふ無骨乃家人等

が爭論耻入る朝廷の叡問に達し宣旨乃御使
と被成の事真加乃やと恐るる奉存の下僕ども
何等乃御答を蒙りとも更なり分るる処却り
寛宥の御沙汰に預け事重帖あり奉存此
御恩と思ひし御修理の事いさう等閑に仕ま
し且長政のどおびしども織田殿の御妹に
連添て然る一家の好を厚く仕し身の何乃異心
りゆづと勅諛乃御請台命の御答あり奉願
謹でしと述べら三田遠藤中島等下知あ
りけしといづまじも恐入る引返りのまじり蹲踞
り畏り居たり次は藤吉郎味方の兵士ふまじり

大略言三編卷之二

演説ありて柴田佐久間も今更面目ありて休
て早く和乃者と引連て退去し木下本陣へ参上
し事安全と和睦仕ゆると言上しけしバ織田殿
木下の働もめづるごとくあざう手柄れりと賞を
らまてけし但織田方よて五百三十余人手を負け
まて浅井が手の者も三百八十余人傷をまげり

將軍家御移徙乃事

并勢州國司家騷動乃事

織田浅井両家乃士卒等口論を仕出し歴々の老臣
諸士あまを憤り終る合戦も及び双方手負死傷の
やまわく並に軍ううい立増りくるやどの大

喧嘩とあり容易に鎮めめなく見えしを木下藤
吉郎参内し勅宣を申下し一言乃下し騷動を鎮
め王威武威二のありて立て双方忽ち和平あり
浅井が勢へ清水の宿陣を引返し柴田佐久間を本陣
に歸すのまでをもけしとあまを闘争を仕出したこと
流石老臣乃上しを似合しめと噂とを聞
く元々憤怒の氣の散せりて処あまをあまに胸
中穏ありめと信長乃御前へ罷出せけるハ浅井
家乃兵士等我意の募りて無礼を致しめし一形か
らび然るどこの儘捨置せりけし後日といふある
不思議を仕出しゆえんも知るるに急度御糾明

乃御沙汰ありて然るべくいと勸免奉りけしハ信
長聞食さるれしハ知れぬ縁者の好を深
く思召寛宥おれさせら給ふ事後悔至極の思召
早くその始末と穿鑿ありて是非と正しくあり
然るべく仰出さるけしと秀吉承りて竊り言
上りけしと浅井が手の者どもを御糺明ありて
備前守氣早乃若大将ありて怒りて發し二心
と生じしと今や御縁者として御親ありて
ふもあつち江州侍と踏鎮め京都の往来と心安く
おもえらん為よゆえに一旦乃御憤りをあらは
れ給ふ是式の事お依て大事の妨と引出しおん

しと近頃短慮のしなりと申すゆえに此度の何氣
あり御挨拶ありて然るべく殊に此度の騷動の本
ハ味方の輕きもの共が浅井の兵士と侮り朝つたる
よ事起りしと御糺明乃上りてその始末分明お
ありし時味方よもその御咎仰付らるしと濟
やゆとく尤もゆえ毛と吹く疵と申すたるは似
て然るべく言上ありてのバ信長もその趣
をいやく悟らる改め清水の浅井方へ使者を以
ていゆり別心ありて申す送らる念頃音信あり
て長政も別使を以ていゆり疎意ありき旨
と申すは表向をわたりて無事と治めし

いとも信長内心は淺井を心中計り難きそのく時節
あつて討果はるべきものと思ひ立ると長政も又
信長といふをくわくわく初らむしあり然るも
公儀乃御用と等閑なることあはれしは淺井
も日夜普請乃加勢をいそぐれ信長衆もいそぐ
精力をばらばらとせしむるも早速その功成就して四
月六日將軍新御所へ御移徙ありその規式嚴重の
綺羅莊飾故實と正さむたり乱世のめづるし大
大儀といふに聖日直に御祝の御能あり勲功乃
諸將をばらばら隨逐艱難の諸侍は見物とてさ旨と
仰出さむたりそのら信長乃下知しし將軍家御

所成就し御移徙も濟はる上を諸國乃武士歸國
あつて然るべしと觸らむしは淺井長政も將軍
家へ御礼の上く不日は京都を引拂ひ江州小谷へ
歸城あり信長も暫く在京し浴中乃仕置彼是沙
汰ありやがて内裏造營急ぐべき由と掟らる普
請奉行をばらばらの兩人は妙顯寺日教上人を加えて直に
造營せしむる將軍御所といひ禁裏造營とい
ひ一方形ぬ大營ありし將軍御所をばらばら成就
し内裏諸公卿乃殿舎や一宇も残さず修理わす
との沙汰をばらばら主上もの獻感ありしは
しげふ

永祿十二年正親町院御宇なり後奈良院第一乃
皇子御諱の方仁御母を贈皇太后宮藤原榮子永
正十四年丁丑歳降誕なり後弘治三年丁巳歳宝
算四十一より踐祚なり今年ハ五十三歳なり

諸卿相いばとも愁眉を開きあはれは是ひとも諸
司代木下藤吉郎絶代の智計を以て數萬の金子を
暫時に集たりしを太甚感賞ありて終に敵
聞の達しきを秀吉とのみものを希有乃男あり
と勅定ありけりかくかく信長を五月十一日京
都と發足ありあひ濃州岐阜へ還陣ありけり

今度木下も信長と共に歸國ありて定め
し將軍家より先内裏より今も京都
静謐中で残り置ありて由仰出たりしは是非
く木下も乃置けり然る秀吉の面目身もあ
まのぞ見よと抑信長木下を召具して歸國わ
るゝと定めし勢州を切平げん本意は
どかり勢州發向乃事ハ今春正月早思ひ立きて其
評議頻りある處へ本國寺合戦乃注進より取もの
も取あむと上洛あり五月月中旬在京あり
けり斯く延引あり此時南伊勢北畠具
教入道不知齋同新國司左少將信意を信長今春攻

来るの風聞を聞防戦乃用意をせしけり本城大河内との及を以所くの枝城に兵士をあり専合戦乃備をせし待てしれ京都に三好蜂起せしと信長上洛しけしを伊勢發向乃事暫時無沙汰あり國中静りありける同年乃夏伊勢の國よ不思議乃騷動出来せりその子細を聞よ具教入道乃舎弟の木造乃家を繼で木造中將具正との者ありその子を左衛門佐長正とのたゞ木造具正乃養父左中將俊茂乃長男具康小嫡子ありける我れを木造乃血脉形も然るも具正の家督を奪せしと無念ありとのひめが為方形せしと終に源城院との僧の弟子と

そりてけりそのもの才智とて辨舌とてなり小僧形も勇氣ありて武藝を好む力量もありけりその事も出来りその際よ還俗し木造乃家を起しんそのを伺ひ居たり又木造乃家老小拓植三郎左衛門尉と云ふものありそのも具正長正よ心服をびありけるといふしそり知たりげん龍川左近將監一益具よこれを悟りしむ拓植が處へ使者をせり北畠家乃政事をせしそりその國より亡ぶる然らば面く如何のそその子孫相續し先祖乃靈魂乃歸する處を失はざる様よ計らふとて肝要と覺ひしれよ織田家よ從く將軍の御味方よ泰ゆも各本領を安堵し家敏昌

相違あへりしと勧めしほど拓植ものゝしくあも
ひ立たりし所を瀧川が中又更の透間也信長
乃武威日よゆんよめり向ふ処敵なく將軍家と補佐
して中絶の柳營を再興と奇代乃名將といひ之我
主家乃北畠家を將軍家よ寸功あく天子よ忠義を
一今日もあは信長勅命を奉り將軍乃御先手と
て寄来らんしと何とて一日も休まざる瀧川
勸めり織田家よ懇志を通り將軍乃御味方よ茶を
主家も我身も安穩おらんしと計るべしとあはひ定
め先々の源城院よ相談しつるよ同心なりと答へ
しかば即ちこの僧を使しつる瀧川が許同意なり

と答たりし瀧川源城院を迎へ入木造父子味方
おらん謀を合せしむる源城院智辯の任せしその
始末を述げしより一益斜形喜ひ猶子乃約束を
かき苗字をあへて還俗せしめ瀧川三郎兵衛一雅とぞ
名乗せけり是より拓植と瀧川志と合を終り木造父
子と瀧川左近引合信長乃味方とあはしむる器具教入
道不智齋大に怒り獅子身中乃虫と是なり其
やうよあ難しと言葉を發り木造父子を責伏すと
勢揃ありしものも木造の織田家乃後援あはし城
中更に恐るゝいろやく防戦乃用意をせしけりしより國
司大勢よ押寄戦とも勝負更に見えしごとくありける

瀧川一益使者と京都へはるをうると時節少ゆと言上りけ
るよふく信長歸國ありしむも國司乃勢ハ信長乃来
らぬさよ引取やといつまた早人敷とやと多て大
河内へ歸つてげは木造の城より丈夫よりくとも
一信長乃出馬と待りてと註進と信長岐阜よ入て志
をわく人馬と休息せり不日進發ありてを觸ら
せり

重修真書太閤記三篇卷之十四終

大河内ハ伊勢國飯高郡あり木造ハ一志郡との間
相去こと三里許木造より菜名ヤを一日路なり

重修真書太閤記三篇卷之十五

織田殿南伊勢發向乃事

并大宮入道返答荒言乃事

執州乃奉行とくく菜名小在城とく瀧川左近將監
一益南伊勢乃諸士と歸伏とくめんことを計りける
よ國司乃舍弟木造中將具正同左衛門佐長正父子公
方家乃御味方とあり信長小隨順しひふと國司深
く憤りてとを攻潰さんと大軍と以て取圍く合戰數
日よ及ぶ急ぎ御發向ありて勢州一圓小御手よ屬せり
おとす時いたるゆと一益乃注進頻りありけは信長

尤と思召早々京都より歸國ありしかども暫時諸將
士と休息せしめそのら進發ありと旨定らしむけ
処小國司らの由と漏聞て神速小人數を引上り信
長も軍馬を發しむるにその中より京都守護の後
人と差上を木下藤吉郎と呼返しあそんと見合せ
かろしめしけり既小夏も過秋の至りしころ
時節ありしころ木下が代の為小織田御長丸

織田御長丸と信長の七男武藏守信吉の小名あり
佐久間右衛門尉村井民部丞林佐渡守島田所之助五
人と上洛せしめ洛中乃仕置諸事の政道互に相談乃
上取計らしむる由と仰出する五人の輩京小至り將軍

家よ此旨と言上りけり將軍家も名殘惜く思
召しもの是非を木下小歸國乃暇と賜しけり藤
吉郎御暇請りたる御所へ出仕せしむ將軍家御前
近く召出さる長く在京の勤勞淺く殊更洛中静
謐無双乃大功なり依り江州長濱城より一萬貫乃地
と添賜する由上意ありしかども秀吉わたくし辭し
奉り信長より過分の所領と宛行と罷在しむるに
も不足しむる將軍家よりの御恩賞深く恐入るに
信長乃中付と守りていさか忠義小似らむ事働さ
ゆとも左程乃事おもゆむに御理中上ゆよ
らり將軍家より御直より岐阜へ仰遣はせけるよしぞ

藤吉郎歸國して御目見の時彼將軍の御内意長濱を
下さるる旨仰出らせしを何故に辭してゆひしや
近頃不審の思召由宜ひかば藤吉郎謹で御請上
けり忠臣と二君は仕えし秀吉不肖小ゆきものを
しやどの事の承り及ては我君乃御恩山にぞく蒙り
て人數もかゝり如く引廻し妻子所從乃衣食中乏
しくはまふかくゆく將軍乃御恩を戴ゆき二君小仕
りゆきゆきや去小依て辭退仕りゆき別よ所存
ゆきゆきと申上りかば信長中々厚く感ざらむ藤吉
郎は智勇拔群なるゆきゆき忠義厚く無欲の名七
ありと稱美あり將軍家御懇志を申上意ありと

御請上と申し事先以失敬至極と申べし早く御請
申上て然るにと申渡さるるものら信長勢州出馬
乃評義ありける

太閤長濱小主たること永祿九年より小く加藤清
正乃五歳の時よりと續撰清正記小見たり然る
ども長濱と申名ハ天正二年より小くと申るに
今濱と申る

藤吉郎申はく北畠を元來公卿小く武藝乃家小
あり然るに朝家乃貢税もの納めを頼り弓馬
を携りて將軍の御味方小を察らば是等の罪と
鳴々征伐ありまると御尤小然るに數代

相續乃國司少少家子郎從譜代相傳しつゝその負
數ひハその家國滅亡せんしと知るとを傍あつて見く
を居ゆゑとてさきとて手詰乃場小至て必至は働まひ
その六七百余もゆぐし左ひもんの容易御本意遂々
とがたつゝぬらん因て其存付ひ処ハ君の御威光と
以て彼家中と怖しその上まゝ利害を説しぬ山路
神戸あとのごとく歸伏せし様御賢慮を回らされひ
方然るまゝと勸免げを信長より尤の事ありしと
承引あつゝ尾州濃州江州北伊勢乃兵士七萬余人の
着到まゝ同年八月廿日岐阜の城を進發ありし翌日
乘名小着陣ありしゆと瀧川左近一益待迎へ奉り御馳

走中上げを爰小一兩日滯留ありておろし廿三日
木造乃城へ入るゝ城主木造具正父子をめぐり拓植
三郎左衛門瀧川三郎兵衛城外へ出て御目見ありや
かく城中へ招請し奉り様々饗應奉りけりそのち
信長合戦乃手分とありしゆら瀧川が勢小関乃一
黨を加へて森上野の両城を押え
上野を奄藝郡より津と神戸乃間あり伊勢工藤
乃一族分部氏乃城あり
織田掃部助より工藤衆を加勢とて今井德居乃寄
居を押えしゆを信長の惣軍とてそのちありて大河内を
押詰らるゝとの定めあり

大内記三編卷之十五

大河内と木造乃間甚目肥留田村畔野箕田ハ一志郡
 あり深長伊勢寺殿藤木四野と飯高郡あり
 然とてを軍勢進發よ及ぶ木造よ一兩日逗留
 しほとて即秀吉乃勸め一処あく籠城乃輩小信
 長乃大軍野も山よも旌旗乃充滿とて体とを
 とその心氣と奪ひ降参とめん計策ありとバ大将
 鷹狩川狩して日々近郷と道遙かゝり七萬乃勇
 士所よ散在して隊伍と乱る号令も行つて
 乱妨狼籍乃愁れ進退駢引手足の如くその練熟
 言語よ絶たりとて見聞そのいふる湯地鍊城
 ても此等が押寄攻たらん一日とも休えがし

と思ふぬとのありては此時北畠具教入道不智
 齋同新國司信意織田勢の寄来る由と聞て兼て期
 したることありとて少も驚く氣色あく枝城よ込置
 輩軍の方便と下智一防戦乃備とてかたけ
 先大河内の城よ國司父子と大将とて次男長野次
 郎藤教

安濃郡長野城主長野大和守藤定乃養子之藤定
 と工藤左衛門尉祐經次男薩摩守祐長の長男駿
 河守祐政延應元年とてめく長野郷よ移つて
 小十三代と經たり藤定天正四年正月八日卒
 と梅光院とよ

一族より森木飛驒守其子彦市郎方徳民部少輔林
備後守との子新之丞との外田丸波瀬堀内園東田の面
々々郎等少々鳥屋尾石見守

鷲尾家の庶流鳥屋尾氏富永の城主との

鳥屋尾與左衛門同右近將監水谷式部大輔同藤次郎

飯高郡立野の城主水谷式部大輔同六内同藤次郎同

淺右衛門大河内乃從騎との

安保若狹守同式部少輔同大藏大夫同左門同彈正

左衛門同左馬允同次郎市岸江又三郎

安保氏大江氏伊賀國名張乃城主との安保大藏

乃弟と岸江大炊助との子又三郎あり

磯田彦右衛門佐々木源左衛門同又左衛門野呂左近

山本左馬助長野九郎朴木隼人日置大膳玉井兵部星

合左衛門稻生勘解由水野勝次郎阿曾彈正大内山但

馬守とほめとく南五郡乃兵士とく籠城をり

備中と諸城と守る輩今徳山よと奥山常陸介上野

乃城あら藤方將監阿坂の城よと大宮入道との子大

之丞岩内乃城あら岩内右京亮八田乃城よと捕七郎左

衛門正具いつとも兵糧矢玉沢山よ用意一防戦乃備

嚴重なりとのも令信長乃軍勢七万余人山野より死

満しく旌旗天と覆ひ鎗長刀を日よ輝さとの威風頗

強大そりけるりり諸籠城の大將分りとのめりり覺

悟乃上あまそその手乃兵士末とる者どもを敵乃勇
威よ恐怖しそや退屈しそを見えたりけるそのふろ
信長乃使者諸城よ参向し無罪者どももの乱軍乃際
よ討と老若男女知とそに輩の矢石よのらんこめ
不便あるよ然るこ計策もあつちまわしけりあど勸
めしかど岩内乃右京亮を大河内乃あり行よ依く
如何様しそあそとそを返答と阿坂の城主大宮
入道含忍齋同嫡子大之丞景行同九兵衛為行いほ
まも大膽不敵乃勇士をまどつるよ一千余騎乃兵
士と從く籠城し信長乃大軍と這虫とそおもひひ
たを蟻あごのあひあつちまわし見形し何時よそも

あま敵来らる防と禦しつと一旗あを沢大炊
助河合三郎兵衛檜尾隼人横山九郎右衛門沢田兵
部とそつめ一騎當千乃勇士多く集り阿坂乃城下
よわうける浄眼寺とくる大寺と焼くし馬乃駈
場とひろくしそちらりけたり

正法山浄眼寺文明三年虎藏主開基北畠大納言
材親卿大檀越たり依く浄眼寺殿無外逸方大居
士とつちや朝香山とも記と此城ハ應永二年築
く処とつち

信長乃使者来りて利害とそしげとそ更よ承引とそ
大よ旬了ける北伊勢の臆病者どもを織田家乃方

便よ落いつて降参あつても南伊勢の侍中を
忠義を専らとて一命を惜まじ一國乃人氣南北に
ありつて大軍乃威を逞しくして我を恐怖せし
めその勢よ乃つて面く必死の志を奪はんといふ
ふともいうぞり北伊勢乃者どものごとく容易くそ
らにやぐさや早く御勢を向られぬしつてか饗應
べと為よ態と用意仕つた矢根もあつ我つてあが
さん方々寄あつて具足乃札をたぬしつてやと大音
声よ呼よれバ信長大よ怒つてあつて悪ハ大宮
りかその義おつて神速よ押寄阿坂乃城を微塵
の城よ籠る處の兵士一人も残さじ切尽し見微心

せよと下知あつて藤吉郎かつてあつて大軍
と此も恐まじと却て斯る返答をい味方よ憤怒を
起させ無二無三よ押寄る處を急よ討んと謀るを
知まじつ然死神乃付たるあつてものよ引合と楚
忽乃軍を必定敗北とてあつて彼奴何れとたけし
とも千餘人の過ど君乃威力を以て攻伏りせん
何乃つとさきとつて侮つて敵乃術よ乗ゆを
らん様よ御計策然るを阿坂のとの共斯返答
形一奉つて上を今やつてと待ゆを然るを
く御捨置ゆを臂をばつて鋭氣も漸く挫けゆし
さてその怠惰を油断せし短兵急よ押寄

せりしるくかひ御勝軍までゆべりと諫めしき
うべ信長少一怒氣を志り阿坂乃城をせり置
その外の枝城ども使者を遣一返答を聞きらる
岩内と同様小いもあり又を直に降参を請者
もあつたひを有無といふ使者を追返を者も
就中八田の城主楠左衛門尉正具を先年織田勢
と破て武勇をふるひ遂に降参をせり一どの者
あまの使者を立らるも無益なりとて八田ハその
義もあつたけり然るに諸城主乃返答も區々遮
る降参のものもあつた日數あつた信長大宮入道
の返辞あつたに奇怪なり一攻攻を見むやとて惣

軍七万余騎闕乃聲を發一天地を震うて進發を
られその勢潮の湧如く火の原を燎るふ似く向ひ
近づきあつて見つても大宮父子を更小恐る
色形く敵来らば快く一戦の下小互の運を試し
かこ酢と呑らるけけたり

阿坂城攻乃事

并木下武勇惣門を破る事

時よ永禄十二年八月廿七日信長自身阿坂乃城を攻
らるしと打立ち木下藤吉郎明智十兵衛光秀坂
井右近正尚佐内藏助成政等一陣小進で押寄せ
城兵をづらふ一千餘人乃ら大宮入道手の者二百

余人よて本丸の楯籠る嫡子大宮大之丞同次男丸
兵衛沢大炊助河合三郎兵衛等宛竟乃兵八百人
と率し物門を固め鉄炮矢石乏しからむ待りど
織田家乃軍勢寄来り氣早乃若武者真先小進で
鉄炮を打りけ関を作し責めりる城中静まりつ
て音もせし寄手近くと誥寄る所を時分おし
城中より雨乃如くは鉄炮を打りけ矢を放らるけ
防ぎ戦ひける中おも大宮大之丞無双乃精兵矢
継ぎや乃射手あまう惣門乃櫓より大矢を出
し用意しつと小具足ばるる身軽く出立是は
引と強く引んぐ為る寄手を近く待受て引と矢

と打番ひ大音聲の呼るるさかひく用意の伊勢
鍛冶乃矢の根只今振まひししとせりひもてぬ切
と放し

伊勢鍛冶鍛冶素名の住人千五村正重神戸の住
人國助雲林院住人政盛正盛守正等形り
真先小進たる馬武者一騎その矢をあてて死
てけり是と軍乃初と雁股鏑乃差別形く
はめ引つめ散る射出しけと稲麻竹葦の如く打
寄る敵小中つて一矢よ二人ハ手負とも仇箭を更
よ形くつけり寄手多しつとこの箭よをかき
く進み得と攻口よと四度路よありて見へたり

木下藤吉郎といはれはも危きと避く慎みしる必勝乃
利と覺さむとさるるに進めぬものふれども眼前
小味方の色めくと大に怒り腹黒その共の有様ふ
敵いうは強しと為朝教經より増らんとつ
一人の射る矢小怖く逃走するの見苦敷さめし
攻めめく見とて一我に繼やその共と馬に鞭を打
く真先小進しけしと見く勝てさ利と謀らぬを容
易く進まぬ木下ぐの様よいさむ何様攻むは落る
処乃ありあるべし進やくと俄に機ととも直しく押
詰り射しども切しども事ともをば無二無三に攻立
けり城兵心もやうけよとやとて小勢のこもあま

木下ぐ大軍よとて立らば防ごうのみくを見たり
けり大之丞是を見く渠奴一人ぐ下知るる味方
よとて敗らんとするその腹立しゆいし渠奴と
一矢に射落して呉んぶとものごと例乃鳥狩の大箭
をまらめくと引しや木下を目げく切くさあはを
乃氣ひとて木下を射落さんとかとも力の凝つる故
よや弓弦の切しと切しとかとも矢あやまは木
下ぐ高股に射中せうらいたくと立ばりけり木下其
箭を取て味方ふとめ敵に箭をより見りや箭
束と誠よ長けしとてその力無下弱くして秀吉が
身よまとも痛むしとて計の箭よ弱くしてやわ

る早攻入や人々とその箭も抜ぶる味方とをげあし
下知しけるより木下が手の兵ども獅子乃怒るを
ふく責げをぞおんる物門を乗破つと曳く声と
あげく乱入を城方より木下勢の勇烈を怖る面
く逃支度よりける処は大之丞が大箭を以て大勢
を射倒し少く色を直しける木下を射んと
て弓弦を替弓を待りど敵にや乱れを
り城方一度は崩れたり右往左往と逃退をば
大之丞も為方なく無念なりと流く木丸一引籠る
木下透間なく追うけくはるより城方八百
余人乃らるる三百余人と遁せつとも残る

大形討捕をすく生捕をそのひより織田勢に
しと乗入破竹の勢を以て木丸を十重廿重に取
かると只一揉よと勇けり信長軍前より先手は城
攻を見物してはるはる大之丞が大矢の中を
その勿心よ命を落しあを無しける藤吉郎一人
真先よとあつた矢手を負あぐる事とむを
む一番に乗入たる体やう樊噲項羽乃勇に等し
何様彼を凡人あはれと感心なりああより藤吉郎
を招呼し汝を常小危と好むと手痛とをさるを
為りしを聞けり今日の振舞いあもびり
鎌倉乃軍は朝比奈三郎義秀御所乃物門を破て武

勇とあゝいさゝしむも劣らぬ有様はくも義秀と
打返しく秀義と名乗し意も明らふとと稱美わ
つて手自親薬を賜つて息を休むととさうし
仰出さるたり藤吉郎謹くその御礼と申す今日無
謀乃軍とあゝいさゝしむも聊子細いことあり此城如斯小勢
よて味方乃大軍を恐るるを防戦といふことあり
大之丞乃弓勢を頼むるもあゝいさゝしむも然るも味方射
らまゝと進み既に進むるもあゝいさゝしむも見積つて急よと
ゆひが果し君乃高運を上よ衣て難お物門を
攻破つて抑弓矢を我國第一乃兵器よて神代の俣の
法式備つていさゝしむも大之丞我力よ相應仕つる大

弓大箭を用ひゆゑ精神疲さるやくも弓弦の切
る小及びゆ其高股を射られゆゑも弦切ゆ故その
力よと進み既に進むるもあゝいさゝしむも見積つて急よと
て股乃疵を淺くいさゝしむも足ゆひささ痛くも仕らむと
心のやま下知いさゝしむも手強く乗入るゆゑも御覧
乃如く乗破つてゆと申す信長やとと御感
あゝ第一の功よと賞をいさゝしむる大之丞も伊勢
よて聞えし精兵あり弓矢乃用意も等閑よて有
やど計らひ弦乃切し木下の凡人あり
さう天助よて更も他人乃例とあゝいさゝしむも織田勢
本丸を圍み鉄炮を嚴しく打掛し城兵ハ次第よ

討まきくつう三百余人よなりけり寄手の新手を入替
く猛威を振ひけりよらるる必死と覺悟せしものもさ
よがよ生るん道もあをそと逃支度とあしけりよらる
大宮入道も子供よ向ひ所詮防戦かあひぐし偽り
く降参し信長對面あんとそと飛掛つて指殺と
べし迎も死かん命なり敵將を討ぶ本望あらんと
中より大之丞大よ悦ひこぞ誠よ良策あり早く
事を行へしとて矢倉よあけ上り城を開く降参仕る
るそ間是中ぞ乃始末と御免下さるべしと呼らる
故寄手仕寄と緩げ信長へ斯と言上と信長聞食悪
ひ奴乃言状か鏝際乃降参奇怪ありと宣ひけり

明智光秀の諫めてやける様大宮が中条不義不礼
その罪免さそがたしくゆともこの者と御免あく此
外乃城よ籠る輩必死とあしけり然といばまも
五日十日の違入ゆえんあをいしく大宮父子と御免
ゆく諸城の者共とあしけり降参せしめ一國平均の大
功と專とあをそらあをそとやゆとと理と尽し
く述りよらる信長もその義を用ひらとけり
木下とあしけり大宮父子乃降参真實よあしけり
斯にあしけり中よ上げまお信長も同心
て降参とあしけり大宮入道父子を一族郎
等三百余人城を開く降参しけり木下請取入

道父子と士卒郎等と引き信長の陣所へ伴ふ
 大和國へ追放と云ふと披露し途中に於てこ
 事と誅戮と大宮父子案に相違し信長の前へ出
 免りまじと云ふも誅戮の期いふて天と仰ぐ歎
 息し誠し信長を近代の名將あるを若我等が對
 面あはれやと安穩よしと云ふるその機をけりて
 て面會をさるることのかと云ふる言ふくこと
 げりしと云ふ

重修真書太閤記三篇卷之十五終

中庭のまじ誅戮
 大和國へ追放と云ふ
 事と誅戮と大宮父子案に相違し
 免りまじと云ふも誅戮の期いふて天と仰ぐ歎
 息し誠し信長を近代の名將あるを若我等が對
 面あはれやと安穩よしと云ふるその機をけりて
 て面會をさるることのかと云ふる言ふくこと
 げりしと云ふ

